

盆栽の図像学

第四回

楊洲周延 《墨堤の渡船》

解説／田口文哉

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

墨田川の渡し

ここは墨田川（現「隅田川」）のほとり、渡し舟の船着場である。人や荷物をのせて川の対岸と行き来する渡し舟は、昭和の架橋事業によってその役目を終えるまで、墨田川に数多く営業されていた。

渡し舟には、決められた船着場の地名などが付けられており（演歌で有名な「矢切の渡し」：千葉県松戸市矢切）もその一つ、今回取り上げる作品にも「墨堤の渡船」と名が付けられている。「墨堤」とは、現在の東京都墨田区向島に位置する隅田川東岸の

堤を指す。桜祭りが行なわれる桜並木になつており、対岸の浅草地区一帯を含めた有名な観光地区である。

今回はそうした名所を描いた作品を取り上げ、描きこまれた図像をヒントにしてこの絵の情景を読み取ってみたい。まずはこの場所が墨堤のどのあたりを描いたものか見ていこう。

江戸名所のランドマーク

絵に向かって左の対岸には、遠景にかすむようなモノクロームで小高い山の上に立つ建築物が描かれている。いまではピンと



くる人も少ないかもしれないが、きっとこの絵を見た当時の誰しもが心に同じイメージを浮かべていたことだろう。墨田川対岸の山の上に建てられた建物といえば、「待乳山（まつちやま）聖天」だろうと。事実、待乳山聖天は浅草の名所、いわばランドマーク的な観光スポットとして、遠景から見た図ではまさにこのシルエットのような典型的なかたちで、江戸時代から名所に絵に頻繁に描かれてきた神社である。

この絵の待乳山の右のふもとには、吉原通いにも使われた「山谷堀」と呼ばれる水路が合流し、そこに「今戸橋」がかけられている。そしてよく目を凝らして見てほしいのだが、今戸橋の左手前、待乳山からまっすぐ川に下りたところに、船着場と一艘の渡し舟がごく小さく描かれているのがわかるだろうか。これこそ「待乳の渡し」あるいは「竹屋の渡し」と呼ばれた待乳山前の船着場であり、その渡す先は、これまた江戸以来の名所である「三囲（みめぐり）神社」を後ろに控えた、スバリこの絵があらわす場所、墨堤の船着場なのである。それでは、待乳の渡しへのルートを描いた墨田の名所を背景に、どのような情景がここにあらわされているか見ていこう。

三枚続のパノラマ形式と絵の構成

この絵は縦型の独立した三枚の紙を横につないで大画面を作り出す、「三枚続」と呼ばれる形式である。絵を見てみよう。大粒の雨が画面を斜めに走るなか、対岸からの舟には三人の乗船客と船頭が乗っている。船頭と男二人は雨風をよけて笠や麦藁帽子を深く被り、顔は見えていない。客は体を屈めて窮屈そうに舟におさまっており、後ろの男は風呂敷を担いだ商人風、前の男は「台輪」と呼ばれる運搬具に蘇鉄や菊、それに鉢植の松をのせた植木売りである。そして舟の先頭には番傘を開いた浴衣姿の女性が一人。男とは対照的に、後ろ向きにゆったりと腰を掛け、顔を後ろのほうに向けている。その視線の先には、突風が吹いたのであろう、船着場にいる女性二人が裾の広がりをおさえているところを描く。一人は洋傘をさし、他方はまだ小さい娘さんのようだ。

三枚続のパノラマ画面により船着場の情景を広く描いているのであるが、実は紙の一枚一枚を独立して見ると、男たち、浴衣の女、船着場の娘さんと、紙によりまとまりをなしていることがわかるだろうか。どうやらこのまとまりが、絵の情景を見るための鍵となるようなのだ。

身振りが読者を導く、場面をつくる

パノラマ画面で絵を見ると、風雨のため顔を隠した男たちと船頭の指差し効果のために、我々の視線は否応なく右へと導かれていく。ミステリアスに顔を見せないことにより、女性2つのグループに焦点があたるのである。

最終的に我々の視線は、明治新風俗のアイコンとも言える洋傘をもったハイカラな娘たちに向かうのだが、おそらくこの絵にとって最も重要な人物は、中央の浴衣の女性ではないだろうか。一人優雅な舟の乗り方は単なる視線の誘導役とは言えず、手に持った番傘がまるで神仏の光背のように女性の背後にあつて、彼女を強調する効果も決して無視できない絵の働きと考えられるからだ。

この浴衣で川を渡る粋な女性は、おそらく向島の芸者であろう。ちょうど人氣が盛り上がりつつある明治中頃の向島の芸者が、ハイカラな若い娘たちの風雨に翻弄されたしぐさに、舟の縁に手をかけてつい目を留めてしまった、そんななんとも言えない微妙な女性同士の対比が、この絵の核になっているのである。そしてその対比を強調するのも、自然条件を巧みに利用して顔を隠した男たちの身振りであり、これが抜群の効果を発揮しているのである。

作者のあそびどころ

名所を背景に、磨き抜かれた構図をなすとも言えるこの絵には、作者のあそびも見え隠れしている。情景の中心となる女性の存在を際立たせる、船宿の名が記されたように見せている番傘に隠された文字のメッセージがそれだ。この文字は傘の右下から反時計回りに、天地を逆に読むことができる。文字通り起こせば「楊志うゑ」、つまり「楊洲絵」とあり、絵師楊洲周延が描いた絵であることと書いてあるのだ。作者のサインをこのようになところさりげなく、いやむしろ大胆に言うべきか、描きこむあそびどころが、この絵の魅力をより一層増してくれるのである。（続）

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知
■「美術コレクション展Ⅳ 「美術」になった「石」 一水石の愉しみー」
会期：～平成23年3月15日(火) (毎週木曜休館)
■開館1周年記念特別展「ウキヨエ盆栽園—盆栽で明治ヲアソブ」
明治時代の浮世絵版画に焦点をあて、派手で、巨大で、ときにかわいい盆栽があらわされた作品で会場を埋め尽くします。開館1周年を記念した大宮盆栽美術館で見られない浮世絵×盆栽の展覧会です。
会期：平成23年3月26日(土)～5月5日(祝) (最終日以外毎週木曜休館)
*今回取り上げた作品も出品されます。

著者プロフィール
田口文哉 (たぐち・ふみや)
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。

楊洲周延《墨堤（ぼくてい）の渡船（とせん）》
大判錦絵三枚続 右：37.1×24.7cm 中：37.1×24.8cm 左：37.2×24.7cm 明治28年（1895）
版元／森本順三郎 個人蔵

浮世絵師紹介 楊洲周延（ようしゅうちかのぶ）1839～1912
明治時代を中心に活躍した浮世絵師。代々氏族の家柄の子として生まれた。江戸から明治へ揺れ動く市井の風俗や、失われた徳川時代の情景を美人画であらわし大変な人氣を博した。特に、父の跡を継ぎ幕府御家人となった経験を活かして描いた江戸城大奥の風俗は、以前には描くことができない画題でもあり、大衆の人氣を得たシリーズとなった。